

## 精神神経学用語集 改訂6版を読んで

柏瀬 宏隆

今般、学会用語集の改訂版が発刊され、会員に送られてきた。装幀が立派になり、用語数も増加して、活字も大きく読みやすくなった点では、とても進化した。しかし、ページをパラパラとめくっているだけで、あまりにも誤字や間違いが多く目につき、暗澹たる気分になってくる。外見と体裁は良くなったが、肝心の内容は進化したとは言いがたい。

全体的に、本用語集には明確な「基本方針（編集方針）」と「用語の選定基準」が欠如しているのである。前版の第5版では、差別と偏見を生みやすい用語は削除された。例えば、“狂”という字は全て削除された。精神病質者の“熱狂型”は“熱中型”に、“狂信型”は“過信型”に改められた。しかし、今版ではまた復活している。日本語名の“荒廃”も削除されたが、また復活している。

## 夥しいミスと誤り

まずは、本用語集における誤植や誤字をあげてみる(表1~3を参照)。

用語集なので、綴り字には正確を期したいものである。

本用語集には、正誤表と補足表が添付されている。驚いたことに、正誤表の「正」の中にも誤りがあるのである。例えば、“Administrator-Terapist split”と、Tのあとのhが脱落している。また、入れ替えても良い文字なので小括弧( )ではなく、大括弧[ ]にすべき箇所がある。例えば、“根こ(そ)ぎうつ病(抑うつ)”、“不適応パーソナリティ(人格)”、“喪の仕事(作業)”。これでは、「正誤表」の「正誤表」が必要

である。

正誤表で、“根こ(そ)ぎうつ病”に“(抑うつ)”を追加するようになっている(正しくは“[抑うつ]”であるが)。そうであるならば、ドイツ語圏の状況論でほぼ同じ頃に登場してきた概念の“引越しよう病”、“荷おろしよう病”にもそれぞれ“[抑うつ]”を追加すべきであろう。正誤表の訂正が不徹底である。

補足表で、日本語に相当する外国語が全く記載されていないのは、驚きである。併記されている2番目の用語を見よ、ということならば、併記するのではなくて右矢印「⇒」を入れるべきであった。

冒頭にある凡例の8で、「日本語として、あるいは日本語との対応関係について適切であるとは言い切れない語の肩にアスタリスク2つ[\*\*]をつけた」とある(“アスタリスク”と誤記されているが)。その例として“説明と承諾\*\*”、“cynanthropy\*\*”をあげている。“犬神憑き”である“cynanthropy”は納得できるが、“説明と承諾”は解説用語の中で取り上げられ、解説されている。その用語にまでアスタリスクをつけるのは、おかしい。解説までしてつけるならば、“社交恐怖”、“素行障害”にもアスタリスクをつけるべきである。“substance”は単に“物質”ではなく、すべて“精神作用物質”と訳しているのだから、そこにもアスタリスクが必要であろう。

ちなみに、“対人恐怖”を引くと“交際恐怖”を見るようにと矢印(⇒)が入っている。そこで、“交際恐怖”を見ると、“対人恐怖”は併記されていない。あたかも“対人恐怖”は使わずに、“交際恐怖”を使うようにと勧めているかのような表記である。“交際恐怖”の英語名は“homilophobia”、“対人恐怖(症)⇒交際恐怖”の英語名は“anthropophobia”である。“anthropo-

表1 正誤表 (誤植)

誤	正
japanese encephalitis	Japanese encephalitis
distructive behavier disorder	destructive behavior disorder
generalized convulsion	generalized convulsion
support institution for intellectually disorder	support institution for intellectual disorder
neuroleptic-induced akathisia	neuroleptic-induced acute akathisia
Heimwehrreaktion	Heimwehreaktion
Phäneomenologie	Phänomenologie
Gedankeneningebung	Gedankeneingebung
learning disabiliyies	learning disabilities
vocational parent system for intellectual dieorder	vocational parent system for intellectual disorder
absolute bedrest	absolute bedrest stage
	など

phobia”は“人間恐怖”であって“対人恐怖”ではない。“anthropophobia”にもアステリクスをつけるべきであろう。

“対人恐怖”との関連について言うと、解説用語の解説の中で“social phobia”を“社会恐怖”のほかに“社交恐怖”，“social anxiety”を“社交不安”としている。しかし、本文中には，“社交恐怖”，“社交不安障害”だけがあげられていて，“社会恐怖”，“社会不安障害”は併記もされずに抹消されている。“社交不安障害”にもアステリクスが必要であろう。

“attention deficit disorder”は“注意欠如障害”，“attention - deficit/hyperactivity disorder”は“注意欠如・多動(性)障害”と訳されている。“attention deficit”は現在“注意欠陥”の訳語が定着してきているので、解説がほしい所である。(deficitに関連して，“認知障害”の英語名が“cognitive deficit”となっている。)

凡例の12.「可能な限り訳語として原則的に英語をつけた」とあるが、この原則は全く遵守されていない。例えば，“強迫思考”，“強迫神経症”，“激越うつ病”，“精神運動(性)興奮”，“精神運動(性)制止”，“ふざけ症”，“虚無妄想”などに

はドイツ語しかつけられていないのである。

#### 吟味不十分な解説用語，歴史用語， 神経学関連用語

解説が必要と思われる用語には(解説用語)がつけられ、巻末にまとめられて解説が施されている。しかし、この解説用語の選定基準も不明確である。例えば，“説明妄想”が解説用語に取り上げられ解説されているが、なぜこの用語が取り上げられたのか，“説明妄想”を解説するならば、ほかに取り上げて解説すべき用語がいくらでもある。

歴史的用語には(歴史用語)がつけられ、巻末にまとめられている。“精神分裂症”，“精神分裂病”は、すでに歴史用語となっているのだ。であるならば、巻末の用語以外にも歴史用語として取り上げられるべき用語が本文中にあらう。例えば，“インスリンショック療法”，“クレペリン病”，“骨相学”，“ヌミノーゼ”，“類統合失調症，スキゾマニー”など、など。歴史用語としての選定基準も、不明確である。

神経学関連用語には、右肩にアステリクス1つ[\*]がつけられている。しかし、神経学関連用語

表2 正誤表 (誤字)

誤	正
エッシャー症候群	アッシャー症候群
精神神経免疫	精神神経免疫学
発達障害 [発達能力低下] 支援法	発達障害者支援法
ポジトロン断層撮影 (法)	ポジトロンエミッション断層撮影 (法)
性同一性障害	性 (別) 同一性障害
優位半球	優位 (脳) 半球
劣位半球	劣位 (脳) 半球
周期嘔吐	周期 (性) 嘔吐 (症)
周期気分変調	周期 (性) 気分変調 (症)
周期精神病	周期 (性) 精神病
身体醜形障害	身体醜形 (性) 障害
身体表現性障害	身体表現 (性) 障害
神経薬理学	神経精神薬理学
brain wash	brain washing
overvalue idea	overvalued idea
agressology	aggressology
operation diagnosis	operational diagnosis
J.Kassanin	J.Kasanin
E.Kreapelin (209 頁)	E.Kraepelin
	など

表3 正誤表 (重大な誤字)

誤	正
home violence	family violence
cleptomania	kleptomania
pareidoria	pareidolia
pariomania	poriomania
enuresis diurnal [L]	enuresis diurna [L]
Beeinträchtigungswahn	Beeinträchtigungswahn
manisch-depressive Irresein	manisch-depressives Irresein
Creuzfeldt-Jakob disease	Creutzfeldt-Jakob disease
hypsarhythmia	hypsarhythmia
Propfschizophrenie	Pfropfschizophrenie
Propfhebephrenie	Pfropfhebephrenie
	など

をどの範囲まで採用するかの基準が、明示されていない。例えば、“核間性眼筋麻痺”、“核上性眼筋麻痺”、“核性眼筋麻痺”、“眼筋麻痺”の4つも、独立した見出し語として本用語集に必要であろうか。“鉄道脊椎症”などは、必要であろうか。

### 杜撰な編集, 目立つ不揃い

“ガンサー症候群”、“ガンザーのもうろう状態”と人名の呼び方がまざっている。

“強迫 (性) 障害”は“obsessive-compulsive disorder”となっているが、“強迫 (性) パーソナリティ [人格] 障害”はDSM-IIIの“compulsive personality disorder”が採用されている。“obsessive-compulsive personality disorder”を取り上げるべきであろう。

“仮性認知 [痴呆] 症, 偽 (性) 認知 [痴呆] 症”には英語名“pseudodementia”のみがあげられているが、ドイツ語名の“Pseudodemenz”もあった方がよい。このように、用語全般を通して、外国語の種類の上取り上げられ方が極めて不揃いなのである。

“emotion”は、“情緒”ではなく“情動”と訳されている。例えば、“organic emotionally labile (asthenic) disorder”は“器質性情動不安定 (無力性) 障害”、“emotionally unstable personality disorder”は“情動不安定パーソナリティ [人格] 障害”。しかし、英語の“emotion”と“affect”とは異なるとの考え方もあるので、解説用語に入れて、解説を加えるべきである。

“無動機症候群”と“動因喪失症候群”の両方が見出し語として取り上げられ、同じ英語名“amotivational syndrome”が両方に付されている。どちらか一方で両方を併記して、それに英語名を付し、もう一つの用語には右矢印「⇒」をつけて英語名は不要であった。“潜在統合失調症”と“潜伏統合失調症”、“睡眠時随伴症”と“パラソムニア”、“多文化間精神医学”と“比較文化精神医学”、“中枢刺激薬”と“精神刺激薬”、“院外患者”と“外来患者”、“神経梅毒”と“中枢神経梅毒”、“女性色情症”と“ニンフォマニア”、“男

性色情症”と“サチリアーグス”, “アルゴラグニー”と“疼痛性愛”なども, 同様である。

“アルゴラグニー”とドイツ語読みをしているのに, 外国語に英語名“algolagnia”しか記載されていないのは, 奇異である。英語名を重視するならば, “アルゴラグニー”ではなく, “アルゴラグニア”を採用する。あるいは, ドイツ語名の“Algolagnie”も入れるか, である。“パラフレニー”や“アロヒリー”についても, 同様である。“hypermetamorphosis”の訳語に“変形過多”のほかに“変態過多”が加えられているが, 必要か。

“一人歩き”, “一人立ち”, “一人っ子”は, (発達心理学では重要かもしれないが) 精神神経学の学術用語としては必要か。

一般用語の“燃えつき”は入れないで, “燃えつき症候群”を採用すべきであろう。

“外界意識”には小括弧の“(精神)”が付与されている。大括弧の“[精神]”の誤りである。これでは“外界意識精神”でも良いことになってしまう。そして, 同じC. Wernickeによる関連用語の“内界意識”と“身体意識”にも“[精神]”を付与しておかなければ, 不揃いである。ちなみに, “内界意識”は“Autopsyché”の日本語訳なので, “自己意識”の方が良いであろう。

このように本用語集には, あまりにも誤りや不揃いや問題点が多い。本書をいわば「叩き台」として検討し直し, 早急に新訂版を作成して会員に送付されることを強く望みたい。